

國學院大學学術情報リポジトリ

話題提供3保育表現技術を題材にした反省的実践力の育成

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 結城, 孝治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001300

話題提供③

保育表現技術を題材にした反省的実践力の育成

國學院大學人間開発学部子ども支援学科准教授

結城 孝治

保育者の専門性×反省的実践

國學院大學の結城です。題は「保育表現技術を題材にした反省的実践力の育成」ですが、具体的には、絵本の読み聞かせ場面を取り上げ、学生が読み聞かせを上手になっていくための指導そのものも含めて、どうしていいかということを考えるのが、今回のテーマです。最初は、「教員がやり方を指導するか、学生が自分で自分のいいところ、まずいところを見つけ出して自己研鑽していくのか、どっちがいいのか」という話から始まったのですが、あまり学生に教員が指導するよりは、自分の様子を見ながら、もしくは相手の生き方、仲間に目を向けながら成長していく、そういった過程を一年生の段階からやってみようではないかというのを、今回報告させていただきます。



幼稚園、保育所の先生の自己評価というのは、最近よく言われています。これは、平成十九年（二〇〇七）、学校教育法の同施行規則の改正に向けて出て来ました。その翌年の「保育所保育指針」の改正においても、自己評価のことが書いてあります。それから、平成二十四年（二〇一二）、中央教育審議会の答申において、「教職に対する責任感、探求力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力」という形で、自己研鑽しながら学び続けようという力が、幼稚園の先生たちにも求められるようになりました。

「学び続ける教員像」、教師像として、こんなことが文部科学省の資料に書いてあります。「教職生活全体を通じて、実践的指導力等を高めるとともに、社会の急速な進展の中で、知識・技能の絶えざる刷新が必要であることから、教員が探究力を持ち、学び続ける存在であることが不可欠である」（「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」、中央教育審議会教員の資質能力向上特別部会、平成二十四年六月二十五日）。結局、これは幼稚園の教員のみならず、保育士や保育教諭を含めた、保育者像全体としても共通性があるので

はないかということです。幼稚園の先生、保育所の先生を含めて、私たちの保育者養成に関わるため、そういった保育者像を目指して、学生さんたちを育てていくということです。

「学び続ける『保育者像』」というのはどういうことか。私、実は保育学の専門でも教育学の専門でもなく、心理学が専門なので、こういう言葉について、初めて経験するものが多いため、「学び続ける『保育者像』」とは、どういうことを言っているのかということ、自分なりに考えてみましたところ、「自らの保育を反省的に捉え、日々その反省を実践に生かしていく姿」なのだろう。では、自らの保育を、どのように反省的に捉えていくのだろうか。園内研修とか園外研修とか、最近だと「同僚性」という言葉が出て来たりしているようです。同僚との協働の過程において、自らの実践を捉え直す。そんなことが言われているのですが、ただ、私が考えるに、先輩保育者から言われただけで、本当に反省的に自分の保育を見直すことができるのだろうかというの、つくづく思ってしまうところなのです。言われても、何を指摘されているのだから、ピンと来ないとか、先輩の保育を参照しても、自分の姿が全然分かっていないので、私と同じとか、僕と同じですみたいな。いや、全然違うからみないなところも、あったわけです。

やはり、自分の姿ということを一回きちんと見つめ直す過程が、養成段階から必要なのではないかというふうに、私なりに今考えています。自分自身、自らの保育行為を他者の視点を持って捉え直す力というのが必要になっているのではないかと。同僚から指摘を受けて反省的に振り返る力を身に付けるためには、言われていることをきちんと反省的に捉える。つまり、自

分の姿がこうで、周りの人が言っていることはこうで、だから、こういうような改善をしなければいけないのだという、そういうプロセスの最初にあるのが、自分の保育を他者の視点を持って自ら反省的に振り返る力。つまり、セルフモニタリング力みたいなものが、必要となってくるのではないのかな、というふうに思っていました。

自分の行為を他者の視点を持って自ら振り返るとか、実際それをどうやって養成段階で育てていったらいいのだろうかというの、ここ二年ぐらいの私の課題です。自らの保育について、ビデオ等を視聴することによって他者の視点を獲得できないか、というような、これも仮説なのですが、こうしたことを研究としてやってみようと考えました。正しいかどうかというよりも、こういうことをやってみたときに、学生はどういうふうに成長するのかというの、疑問としてありましたので。先行研究とかについてはまだ調べ切れてはいないのですが、なかなかこういう養成段階において、ビデオを使って、自分の姿を捉えて、他の指標と比べてどうなっているのだ、というような研究はあまり無かったので、とりあえずまずはやってみようという感じがします。もしこうした力が獲得できるのであれば、つまり自分の姿を見ながら、こういうところがまずあったのだ、ああいうところが良かったのだという形で他者視点を獲得できるのであれば、自らの保育の評価に、それがどういうふうに反映されるのだろうかというの、ちょっとした問題意識として持っております。まず自分のビデオを見て、反省をして、では、次の実践の場で、それはどういうふうに活かされるのだろうかという、そこまで追っかけてやってみようかなというふ

うに思います。

もう一つ出て来るのが、やはり人から言われたことです。これがどういふふうに響くのか。自己評価、自分の姿を見て自分を評価して改善していく方法（セルフモニタリング）と、人から指摘を受けて、その指摘を受けたところを改善していく方法（同僚性による相互評価）と、どういふふうに違いが出てくるのか、というのが今回のお話になります。

本研究の方法

次に方法についてお話しします。まず、私立四年制大学の保育者養成課程に所属する一年生の段階で、絵本の読み手を十二名、六名ずつ群分けしました。セルフモニター群というのは、自分自身が映っている映像を見て、自己改善して調整していく群

方法		評価項目（自己評価・相互評価 「非常にそう思う」～「全くそう思わない」5段階）
読み方の観点	質問1	子どもが聞き取りやすい声の大きさを読んでいた
	質問2	子どもが聞き取りやすい速さで読んでいた
	質問3	子どもに聞き取りやすいはっきりした声で読んでいた
	質問4	場面によって声の調子に工夫して読んでいた
見せ方の観点	質問5	場面によって抑揚をつけて読んでいた
	質問6	行間や文字のスタイルなど意識して読んでいたか
	質問7	子どもが見えやすいよう絵本を持っていたか
	質問8	子どもが見えやすいようページをめくっていたか
相互作用の観点	質問9	顔や視線を子どもに向けて読んでいたか
	質問10	表情豊かに読んでいたか

（セルフモニター群（SM群））。もう一つの六名の群（相互評価群（PE群））は、聞き手の方たちが評価をしてくれるのですが、その評価結果から自分のまずかった点を見つけ出して次に活かしていくという、そんな群分けをしました。評価をする人は、お客さん役というか、子ども役というか、聴衆役の人に読み聞かせをするというような形で、評価者は十名ぐらいおりました。

二回、読み聞かせの場面を撮って

います。「模擬練習」という形で一年生の七月に大学の演習室において行いました。これは一応、ここを基準に上がったのか下がったのか、ベースラインとして「模擬練習」という場面を作りました。本番が「大学フェス」です。これは十月に行われる「共育フェステバル」なのですが、そこで子どもたちの前で実際に読んでみて下さいとして、そこでも同じような形で評価をしてもらうことにしました。

評価の観点には三つあります。質問は全部で十個なのですが、「読み方」に関しては少し評価の観点が多く五項目、「見せ方」について三項目、総合して子どもの様子を見ているか、自分が情を少し調整しているかという項目を「相互作用」という形で作りしました。これについて五段階評価をしています。質問用紙は、何かをサンプルにしたわけではなくて、これは学部共同研究でやっている先生方と協議しながら、こんな項目を立ててみて、学生に気付いてもらえたらいいね、という形で作ったものです。

実験デザインはこんな形になるわけです（図1）。本来的には両群ともにビデオ

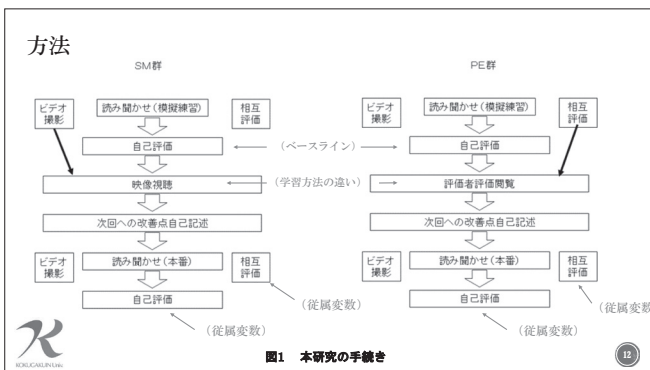


図1 本研究の手続き

を用いて撮影することは同じです。学習方法の違いは、自己映像を見てか、他者の評価を見るかの違いです。PE群は他の人の評価を見て自分の改善点を見つける。SM群のデザインも殆ど同じです。両方ともビデオ撮影はしています。ただ、PE群は、自己映像は見ずに相手、聞き手の方の評価だけを見せる。従属変数としてとるのは、相互評価と自己評価です。聞き手の、読み聞かせを受けている方がどういうふうに評価をするのか、読み聞かせをした人が自己評価をどうするのかとか、ここを従属変数として比べてみようということです。

評価シートは、読み終わってから付けてもらいます。読む位置は「模擬練習」も「大学フェス」も同じにして、椅子に座ります。椅子に座るといのが方法として幼児向けどうか、という問題はあるかと思うのですが、椅子に座るとい形で今回はやってみました。

研究の結果

それでは、まず、学習後の両群の差（結果1）を少し見てみましょう。「大学フェス」のときの相互評価の値、どう違うのだという形で群ごとに見ても、そんな大差は無いのです。PE群、つまり他の人からの評価を受けて自分の改善点を見つけようとした学生と、自分の映像を見て自分の改善点を見つけて改善しようとした学生と、実は何も変わらない。殆ど変わりはないのです。違いが出てくるのは、相互評価と自己評価の差です。相互評価の値が、自己評価よりも高く出て来る。逆に言うと、自己評価の値の方がやはり低い。つまり、両群ともに自分を厳

結果1 評価方法の差

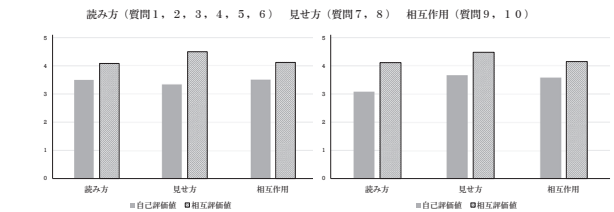


図4 PE群における評価値と相互評価値 (大学フェスティバル時)

評価の観点別に見てみると、両群ともに、自己評価よりも相互評価（他者評価）の値の方が高い

結果2 相互評価を指標とした学習方法の差

評価項目（自己評価・相互評価）

- 質問1 子どもが聞き取りやすい声の大きさをで読んでいた
- 質問2 子どもが聞き取りやすい速さで読んでいた
- 質問3 子どもが聞き取りやすいはっきりした声で読んでいた
- 質問4 場面によって声の調子に工夫して読んでいた
- 質問5 場面によって抑揚をつけて読んでいた
- 質問6 行間や文字のスタイルなど意識して読んでいたか
- 質問7 子どもが見えやすいよう絵本を持っていたか
- 質問8 子どもが見えやすいようページをめくっていたか
- 質問9 顔や視線を子どもに向けて読んでいたか
- 質問10 表情豊かに読んでいたか

PE群とSM群については、相互評価（他者評価）を基準にとった場合、大学フェスティバルにおいて学習方法間の差はなかった。

→ 評価者の視点からは、どちらの学習方法をとっても技術的な差は現れない。

図5 大学フェスティバルにおける相互評価の測定値を指標とした学習成果

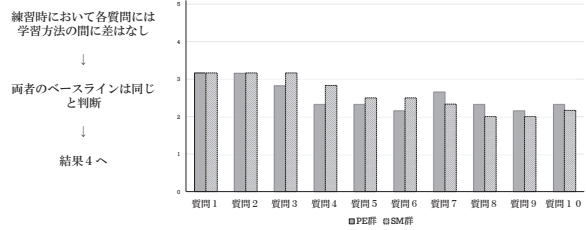
しく見るという傾向がどうもあるようです。次が相互評価（結果2）です。調査項目ごとに、相互評価の値を学習方法の違いによって比べてみると、実は相互評価、つまり他の人が見ると、学習方法の違いによつては両群の間に技術力の差は無いという結果が出てきました。他の人から見ると、どちらを見ても、表面的には変わらないということになります。

次に、相互評価では学習方法によって差がないということから、今度は自己評価を指標にして、ベースラインとの比較を試みました（結果3）。ベースラインがPE群、他の人から評

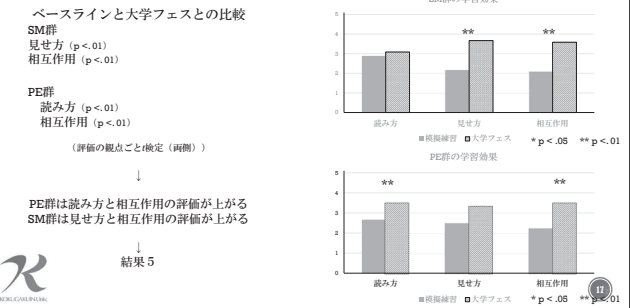
価を受けて勉強する学生と、自分の映像を見て勉強する子と、これは、ずれてしまったら大変なことになるので、まずベースラインの段階でどうなっているかということを見て見ると、これは殆ど同じなのです。つまり、両群は学習する前、練習時においては、基本的に自己評価の値は一緒である。これが、どういうふうに変化するのかというのが、次に見ていかなければいけないことです。

次に質問ごとに見ていくのですが、まず観点ごとにまとめてみました（結果4）。読み方の観点、見せ方の観点、相互作用の観点です。上のグラフがS M群なので、自分に映っている映

結果3 自己評価を指標にした学習方法の差①



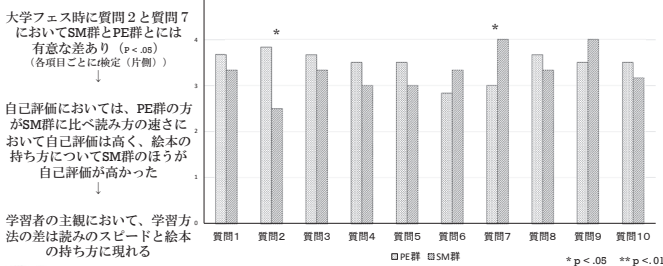
結果4 自己評価を指標にした学習方法の差②



では、この両群の違いが、実際質問紙の中でどういう違いがあるのかということなのですが、端的に二つの質問だけに差が出てくるのです（結果5）。質問2と質問7なのです。質問2というのは何かというと、読み聞かせの速さです。それについては、PE群の方が、「大学フェス」のときにすごく高く評価をしています。SM群の方はそれほど高くないという形で、ここに差が出てき

像を見る方です。下のグラフが、人から評価を受けて改善点を見つけて改善をしていくという方です。練習時と本番とでどういうふうな違いが出たかをグラフに表したものです。SM群の方ですと、「見せ方」の点で自己評価の値が高くなるというのが特徴です。それから相互作用についても高くなっています。一方PE群の方、他の人から指摘を受けてという場合ですと、練習のときよりも大学フェスのほうが「読み方」について上がるのです。相互作用についても上がる。より簡単に言えば、どうも両群の違いというのは「見せ方」の点と「読み方」の点で出てきそうだということです。

結果5 自己評価を指標にした学習方法の差③



ています。それから質問7というのは、本の持ち方です。本の持ち方については、自分の映像を見て学習した方が、高く自分のことを評価するというようなことになる。言われてみれば当たり前ではないかと思うかもしれませんが、心理学というのは、言われていることをきちんとデータに出すというのが仕事なので、こういうことをしています。

結局、他の人からの視点によって、技術力がどう変わったかという話でいくと、そんなに変わっていないのです。ところが、本人の、読み手の意識について自己評価の点で見ると、自分の映像を見る学生の場合には、絵本の持ち方が自分は上手になったと思っているし、他の人から評価を受ける場合には、読み方の速さについて前よりも上手になったというふうに自己評価をしているということです。自己評価が大幅変わっているけれど、客観的に他者からみたら変化してないだろうと言われたら、身も蓋も無いのです。

考察と今後の課題

まとめます。つまり、客観的な視点から見れば、学習方法の違いは保育表現技術には反映されないが、むしろ、内面的な意識の変化（自己評価）に現れるということです。自分の読み聞かせの映像を見る場合には、他者からの評価を受ける場合と比較して、映像情報から参照し易い、視覚的情報（見せ方や相互作用）について改善効果が見られるのです。一方、他者の評価を受けて改善する学習方法においては、自己の映像からは捉えにくい読み方の速さについて、改善効果が見られるということです。

日々の実践を反省して、どういうふうに自分の力を高めていくのか。人から評価を受けてということと、自分で見つけて出来る改善点のポイントには少し差があるようです。自分で見て分かるようなところとか、見なければ分からないようなところについては、実は言葉による指摘だけなどでは、改善というのは、少しうまくいかないのではないかとというのが今回の研究の中で出てきたところです。これはまだ、仮説の中の仮説ぐらいなので、なかなかこの先に進めていくには、まだまだたくさん穴を埋めていかなければならないのですが。

やらなければいけないところはたくさんあるのですが、学習の方法というのは、色んな形で存在し、それを組み合わせる学生は育っていくはずで。日々の実践の省察に関して、同僚から指摘を受けて自らの保育行為を改善していくことと、映像等による視覚的な情報を使って自らの保育の姿を捉えなおす作業は、ともに一長一短があるようですので、両者の長短を知りつつ、活用すべきでしょう。

また、今回は入れなかったのですが、多分グループディスカッションをやると、また結果が違ってくるのだろうという気がしているのです。みんなですべての映像を見合せて色んなことを言い合うという方法になると、またこれは違う評価、成長の仕方が出て来るのだろうと思うのですが、今回は質問用紙を使って、他の人から評価を受けてまず成長していくパターンと、自分自身で映像を見て自分の改善点を見つけて成長していくパターンと、その部分に絞って発表させていただきました。

以上です。